

世界の教育

イギリスの
技術教育白書

かつて世界の産業の主導性をにぎっていたイギリスが、新興資本主義国であるアメリカやドイツに追いつかれ、前世紀末には工業生産においてアメリカにその第一位をうばわれた。これはアメリカやドイツの教育制度、特に技術教育の発展と中等普通教育の普及によるものであることを知り、一八八九年の技術教育法の成立以来、技術教育の普及に努力をつづけ、技術教育をほとんどの夜間の学校が拡充された。一方また、一九〇二年の教育法によって国および地方が中等教育の普及に力を入れ、中等学校の目的は伝統的なグラマー・スクールの教育内容に影響されて、中等学校の中から職業教育の要素が失われ、当時設立されていた下級技術学校はかろうじて中等学校と別系列の学校として存在し、技術教育は

忘れられて来ていた。
第二次大戦直後、長い伝統をもった教育制度を改革し、戦後の生産技術の発展に即応するために一九四四年の教育法によって、中等教育組織のなかに、グラマー・スクールのほかにモダン・スクール、テクニカル・スクールをおき、技術教育が中等普通教育のなかによりやくその場所を占めるにいたった。それとともに勤労青少年のための定時制高等教育の義務化を定め、カウンティ・カレッジを拡充し技術教育の普及をはかった。しかしテクニカル・スクールの生徒数は全中学校の五%にすぎず、カウンティ・カレッジの義務制が実施されているのも、ごく少数にすぎず、伝統的なグラマー・スクールの優越性は依然根強く残っている。

イギリス政府は第二次大戦の終りに、高等技術教育の発展のためにパーシー委員会を組織し、一九四六年にレポートを発表し、「指導的な工業国としてのイギリスの地位は、産業に対して科学を最大限に応用することを保証することができなかったために危険にさらされ、この失敗の一部は教育の欠かんによるものである」という結論に到達し、テクニカル・カレッジのために向う十五五年間に五千万

ポンドが必要であると見積っている。この報告書によって、技術教育の大学の施設設備のための財政的措置は年々とられてきたが、技術教育の内容と方法の検討、基礎科学の研究、高等技術教育の基礎となる中等技術教育の普及、教員の養成等については、十分な措置はとられなかった。
戦後十年間の技術の革新という客観的な条件のなかで、またアメリカやソヴェトにおける技術の発展と生産の上昇に対する焦燥から、技術教育拡充の措置をとらざるを得なかった。特にソヴェトの第五次五カ年計画の成果と、アメリカにおける「ソヴェト研究」の報告は、イギリスに大きな打撃を与えた。
昨年二月イギリス政府は、「技術教育」と題する技術教育の拡充に関する白書を国会に提出した。この白書は、緒言に次のように述べている。「この（技術教育拡充の）目的はわが国経済の基礎を固め、国民の生活水準を改善し、かつ海外諸国に対するわれわれの多くの責任を効果的に果たすことにある。……新しい材料が発見され、新しい方法が採用されなければ、イギリスの産業は衰退するであろう。（技術の）革新の歩調は速まりつつある。それにとともに技術教育に対する必要と需要

も高まってきた。」この中で技術教育の現状を分析し、一九五六年から一九六一年までの五カ年に、高級技術者Ⅱテクノロジストを現在の五〇%を増し、教師Ⅱテクニシャンを二倍に増加し、それに相応する熟練工Ⅱクラフツマンを二倍にし、これら各層技術者の技術的水準を高めるための計画を発表し、そのために施設費として五カ年間に七千万ポンド、設備費千五百万ポンドの予算を計上している。

この白書は「現状を分析して、高等技術教育の一そのの拡充をはかるために五カ年計画をたて、その最も緊急を要するものから実施すること」を目的としている。しかし、「高級技術者は、その計画を生産に移すために、教師や熟練工に依存し、下の段階で高級技術者を適当に支えることなしには、その能力を増大させることはできない……。学校における教育を改善することによって、技術教育のピラミッドの裾野を強固にしなければならぬ。」したがって教師の数に見合う熟練工の数は、全労働者の三分の一を必要とし、これは単に仕事の方法を知っているだけでなく、何故にそうするか（の原理）を知っている人間でなければならぬ。この養成のために雇

間労働時間内に有給で通学する定時制のコース・サンドイッチ・システムを設けることを計画している。すでに生産に従事している教師の再教育のためにも、同様にサンドイッチ・コースを設ける計画をもっている。
この白書は技術教育の量的な拡充だけでなく、その内容や質にまで言及し、次のように述べている。「技術教育はあまりに狭い職業的なものであってはならないし、一つの技能や一つの職業に限られてはならない。急激な変化は現代の特徴であるから、将来の技術教育の主な目的は、少年少女に（将来の生産技術に）適応できるように教育すべきである。技術の学習は……数学と科学の基本の上に固な基礎をおかなければならない。その基礎である原理に習熟していれば、新しい構想と新しい技術を採用することが一そう容易である。」「技術教育の領域は、材料や機械の学習だけでなく、計理、原価計算、販売、各種の商業的熟達、外国語は大貿易国にとって同様に重要である。完全雇用は、わが国の経済の動きについての理解が拡まることによつて、解決が容易になる問題である。経済、商業経営、賃金制度及び人間関係のような教科目は一そう重視しなければならない。」さらに、国

語の教育、技術的学習の中で普通教育、技術的な人間完成、精神的・人間的価値などが強調されている。

この白書は一般に好意をもった反響をもたらしているようである。しかし重大な欠かんとを覆いかくすことはできない。雑誌にあらわれた論評の中にも、「これらすべてをどのようにして達成するかについて一言も述べてない」とか、「基礎科学の研究をどうするか」とか、「教員養成の問題をどうするか」と批判されている。この白書はイギリスの科学技術教育の発展を根本的に達成しようとするよりは、むしろソヴェトに対しておくれをとるもどすための焦慮のあらわれで、ロンドン中心の高等技術教育機関拡充のための財政措置を当面の目的とし、基礎研究や中等教育の普及を目的としたものでないことは、パーシー報告書以来の根本的な欠かんである。パーシーの批評するように、「この臆病な文書」「白書の提案とそれに伴う若干の教育の変革は、英国が独立した経済単位として新たな産業革命に参加するにはたしかに不十分」であり、「科学工業を強力に興そうとするならば、労働者階級の大半の科学的技術的水準を引き上げることが絶対に必要」である。（長谷川洋）